



「農学国際協力」誌の新たな挑戦

石川 智士

「農学国際協力」編集委員長／総合地球環境学研究所・教授

この号は、「農学国際協力」が、農学知的支援ネットワーク（JISNAS：Japan Intellectual Support Network in Agricultural Sciences）の学術雑誌として発行されるようになって3号目となるが、この号からは、新しい編集委員会のもとで、電子ジャーナルとして発行される初めての号である。JISNASは、国際協力活動への参加の意図を有する大学等の高等教育機関の連携促進を目的に、情報交換や共同研究・教育活動を展開してきている。一方で、JISNASの緒方委員長が言及されているように、昨今の途上国や新興国を含めた世界の急速な変化は、国際協力に求められるニーズを多様化・複雑化してきている。この急速な変化の中で、この学術雑誌は様々な国際協力の現場での最新の情報の提供と新たな考え方や論点を提起する機会を提供するものでなければならないと感じている。

新たな編集委員会では、JISNASの会員のより積極的な運営への参加を願っており、そのためにも、会員にとってより魅力的かつ有益な学術雑誌であるための改良を続けることとしている。その最初の取り組みとして、国際協力の現場の情報やデータの記載を可能とするために、次号よりケースレポートを、新たな考え方や論点が明瞭となっているワーキングペーパーとデータや情報の記述を主な目的としたフィールドレポートの2つの種類に分けることとした。これにより、国際協力の専門家や研究者だけでなく、ボランティアやNPO関係者など、より多くの方々からの情報やデータが、この雑誌を媒体として広く共有され、また、蓄積されることを願っている。急速に変化している現代社会では、1つの事例が、後世に重要な情報を含むものもあるだろう。また、何気ない日常の情報やデータの蓄積が、大きな変化と今後の在り方を指し示すことにつながることもあるだろう。記録しておかなければ忘れ去られてしまうかもしれない、かけがえのない現場の事実を、この雑誌を通じて記録していただけたら幸いである。

編集委員会としては、本雑誌の学術雑誌としての価値の向上を目指し、JISNASの日本学術会議協力学術研究団体への登録を進めることを平成28（2016）年3月16日に開催された総会に提案し、了承された。現在、編集委員会とJISNAS事務局が協力して登録への準備を進めている。

いかなる雑誌も、読みたいと思っていただける読者がいて初めて存在する意義があり、また、継続的に発行もできる。一方で、この雑誌に論文を投稿したいと思う会員がいなければ、やはり継続的発行は難しい。如何に読者と投稿論文を集めるかは、いずれの雑誌においても大きな課題である。一方

で、蓄積される情報は、長期的な変化をしめしてくれるなど、継続していくからこそ生まれる価値もある。本誌が生み出す様々な価値が、会員や読者の方々にとって貴重なものとなるよう、今後も改良を続けていく必要がある。本誌読者の皆様からも、多くの意見をお寄せいただくようお願い申し上げます。